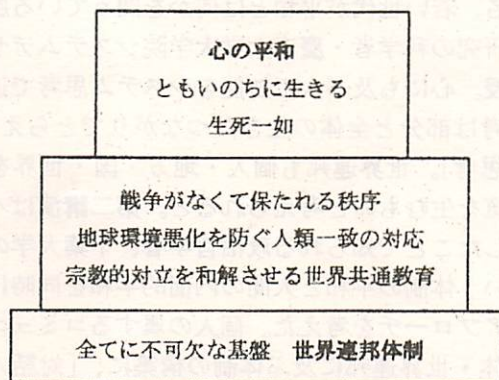


# 心の平和と世界連邦

荻野忠則



世界連邦・北海道

2017.1

## 目次

1	世界連邦運動のアプローチのやり直し	2
2	心の平和は どこから来るか	2
3	ともいのち	4
4	心の平和に生きる作法と世界連邦	6
5	ここからの世界連邦 易行道	7
6	EUの困難に学ぶ 移民なき平安	8
7	戦争の実感の乖離と思いやりの世界化	9
8	人類の忘れもの 国連憲章の修正条項	11
9	だが この足跡を見よ	11
10	心の平和と世界連邦	13
11	戦後世代に求められる世界平和の認識	15

## 1 世界連邦運動のアプローチのやり直し

先日(2014.10.10)世界連邦運動協会理事会で「世界連邦フォーラム 2014 in 東京」の報告と所感交流があった。報告はスクリーンに要点を映しつつ、事務局補佐野田武志氏が行った。テーマは「世界連邦が 21 世紀の今、なぜ必要なのか」。参加者数は百名弱、30 歳代、40 歳代が多く、地方支部からの参加は約 20 名。若い世代が平和とは何かを問うている風であった。第一講演は人工知能研究の科学者・慶応大学大学院システムデザイン研究科委員長の前野隆司教授。心にも及ぶ人工知能をシステム思考で追い、幸福論に及ぶ。システム思考は部分と全体の生きたつながりでとらえる考え方、[木も見るし森も見る思考]。世界連邦も個人・地方・国・世界を対立させず世界政治の新しい価値を生むものと考えられると。第二講演はハーバードのサンデル教授を紹介したことで知られる政治哲学者、千葉大学の小林正弥教授で、戦争がないという体制の平和と人間の内的平和を同時に扱う公共的平和、幸福を求めるアプローチを考えた。個人の属するコミュニティ(共同体)から世界大の共同体・世界連邦に及ぶ体制の構築に、[対話の重要性]を切り口に、多様性を保持しながら、全体に一貫性を与えていくと論じた。講演の後、木戸寛孝常務理事をファシリテーターに鼎談し、会場の皆さんとテーマに迫った。30~40 代世代は戦争のリアリティが少なく、心の平和に惹かれていく。社会体制と心の相互的に発展する平和の重要性が浮かび上がった会となった。

報告に続いて、参加された平口氏、宇都宮氏、森下氏、塩浜氏から所感の発表があり、日下部理事長から「世界連邦運動のアプローチのやり直しが要るのではないか。食欲に取り組みましょう」とのまとめとなった。宇都宮憲爾氏は、今回のフォーラムのような研修会を毎年開催し、当会の有力な役員・執行理事を講師に熱い思いを語り合い、世界連邦の本質・原点回帰を語りたい、と述べた。私は、その新時代の世界連邦論の構築には新旧世代を結ぶ鎖が必要だと感じた。その鎖は何か。それは、運動に一貫した念願が結晶した 2005. 8. 2 の国会決議だと思う。

## 2 心の平和は どこから来るか

私の心の平和を振り返ってみることから始めよう。私は数え年 91 歳になる。87 歳の妻がいる。二人は病院の世話になることはあるが、起居普通で暮

らせている。この状態は健康と言えるのでしょうか。健康のために心がけていることといえば、身近な仕事はすぐ片付けて、心に負担を残さないこと、録音テープで毎日のラジオ体操、家内の用意してくれる食事を感謝して、よく噛んでいただくこと、週2回の入浴と体重測定、歯磨きをし、年に2度ほどの歯の健康診断と手当、息子の提供でグルコサミンを感謝して飲み、就寝前に湯飲み一杯の水を飲むことぐらいである。

私は満50年の教職を終えて、年金暮らしである。贅沢はできないが、温かい家で、日に3度の食事ができ、町内会にも付き合い、ボランティアの世界連邦運動にもほどほどに役目を果たせている。

世の中の出来事は、主に三つの購読新聞で知り判断している。地元紙と全国紙、思想傾向の違い等を考慮し、読み較べて判断を誤らぬようにと心がけている。テレビの情報は家内任せ。大事と思われる番組とニュースは一緒に見る。

急速に発達する情報機器について行くことは容易ではない。パソコンによる資料作りと、Eメールによる情報交換はどうかかできている。行き詰ると教えてくれる友がいて幸せである。携帯電話をようやく使えるようになった。

もの心ついてから八十余年、精一杯努力しつつ生きたということでは悔いはないが、幾つもの過ちがあったと思う。謝らねばならないことも少なくない。それらのことは、取り返しのつかない過去であるから、大過なく生きられて感謝するということになるのであろう。

これから何年生きられるか分からない。限られた時間であろう。やれることには限界がある。やりたいこと、せねばならぬことはいっぱいある。偏差値のこと、算数・数学の構造式と文章題事典のこと等々。しかし、多分、やれずに終わることが多いであろう。名残は尽きないが、やれるところまで全力を挙げて、命尽きればやむをえない。そこまで生きたことに感謝する他はない。

私はアイヌの聖地、シヤクシャインの真歌の丘で、開拓者の父が、49歳の時に生まれた。幼時にアイヌに好印象を持って育ったのは幸せであった。父が70歳になった年、私は郷里の母校の教員になった。翌年、父は亡くなった、父の亡骸(なきがら)の横で一心に見納めの顔を鉛筆面に書いた。このお顔とは、明日葬儀が終われば永遠のお別れである。そう思いながら合掌する。[折る]ということは何であろうか。合掌すると背筋が伸びて臍下丹田にわ

が身が集約された感じになる。さらに、自然に目が閉じて、意識が父の面影から全宇宙の「いのち」にと広がるのを感じる。[祈る]とは私と「いのち」がつながることだと感じたのである。

父母の五十回忌は既に終えた。私以降の家族に未だ死別はない。幸運といえよう。私も含めて、いつ、死別の時が来るか分からない。どんな痛みや病が、私に訪れるかもわからない。それらも「ともいのち」のいわば神業であるから 甘んじて受け容れる他はない。生死一如、有難うと合掌している日々である。

### 3 とものち

「生死一如」と簡単に書いてしまった。その実感への成長には長い学習があった。15歳で師範学校に入学。6カ年の寄宿舎生活。当時、師範学校は全寮制度であった。各室定員6名で、5年生を室長に、各学年1名ずつ、それに旧制中学卒で入学した2部生を1名加えた編成。長幼の序があり、朝晩の点呼、清掃、食事、学習、部活動、入浴、夜警番など、規律厳しい毎日、わがままは許されなかった。その寮の玄関には「純剛」の額があった。入寮



間もなく、応援歌、優勝歌、雪辱歌とともに「純剛歌」が教えられた。憂国の志を持ち、哲理を愛し、日々、純剛の精神に生きると歌った。その一番大事な純剛の精神とはどんなことか。卒業の頃、それは、四聖の一人、孔子が教えた[仁はこれ忠恕か]の言葉にいう忠恕と純剛が同一であることに気が付いた。忠と

は宇宙究極の真理であり、それを求める心であった。恕とは、その真理に沿った生き方である。純=忠、剛=恕と受け止め得たのであった。教員になって間もなくの夏休み、高野山に行った。父の宗旨が真言宗であったし、仏教の真髓を知りたかった。一番偉いと思う管長さんに、仏教の一番の大事は何かと問うた。「シャカが明けの明星を見てお悟りになったことだよ」とおっしゃった。その時は、何か自然の大理想に気づいたのであろうと理解した。そ

の大理想が、実は仏法の「法」そのもの、孔子の忠と同一と気付いたのは、ずっと後年のことだと思う。当時、の購読月刊誌に『大法輪』があったことを思い出す。仏教の原理と逸話掲載のこの雑誌は戦後間もない頃は 20 ページくらいの薄いものであったが、経済復興とともに 100 ページを超える重厚なものに変わっていった。しかし、私の仏教理解はそのように厚みを加えられたのかわからない。玉川大学で稲津紀三先生の警咳に接し、インド哲学の講義を聴けたのも幸せであった。桑園小学校の初代校長 飯田廣太郎さんは達識の方であった。校長になる前年、最愛のお嬢様を病で亡くされ、その悲しみの中で、庭のほうの木の実の落ちる音に生と死の大いなる交感に気づき、『落葉のひびき』を著わし、桑園の校歌に「自然の愛」という言葉を残された。「自然の愛」は生死一如の大いなるはたらき「法」を愛と受け止めたものと思う。その「自然の愛」を遺伝子解説に成功しつつあった生物学者は、60 兆といわれる人体の細胞の遺伝子が一糸乱れず働いて皆が幸せに生きている不思議に見て「サムシンググレート」と呼んだ。村上和雄さんである。

透徹した教育者・哲学者 梶浦善次先生が導かれた倫理読書会で、西田哲学を学ぶことになったのは天来の幸せであった。その入り口は上田閑照著『西田幾多郎 人間の生涯ということ』(岩波書店、同時代ライブラリー243)であった。その語り合いの中で、西田哲学を見てわかるようにとらえたいと思いつつ試みた。青年期から、あこがれつつも見えていなかった西田の思考が少しずつわが心に落ちていく喜びに惹かれて、『西田幾多郎 哲学論文集』全巻に目を通すことになった。そこで西田自身にも図説の試みがあったことを知った。東西文明のはざまに身を投じて思索を尽くした西田の哲学は、他力の浄土教的、キリスト教的な神の実在と、自力の禪宗的な神の実在が、実は一つの實在「絶対無の場所」であったことに得心させられるのを覚えた。西田が若き日の『善の研究』で示した純粹経験は人間の意識が靈的實在に開かれる道であり、その道で生かされている自覚の喜びから、絶対無の場所に至って、彼の念願する世界の古今東西に貫通する究極の宇宙精神の真理(大いなるいのち)を見極めたものであったと了解した。ここに至って、四聖のひとり ソクラテスが「汝自身を知れ」といったときの、その[自身]が西田の究めた絶対無であったことに気づき、ソクラテスが四聖のひとりであったことに納得がいった。世界の四聖をシャカ、孔子、イエス、ソクラテスとした人類の知恵に脱帽した。すべての人も事象も、その大いなるいのち

とともにあって、生かされていることから、私はそれを「ともいのち」と呼ぶことにした。

人類は皆、「ともいのち」に生まれて生きる同胞である。悲惨な戦いのあり得ない世界連邦の仕組みをどうしても仕上げたい。その思いを、世界連邦国会決議(2005.8.2)成立を記念して『西田哲学図説および世界連邦図説 ともいのちと平和』と題する小著を公にした。

更に思い返すと、世界連邦への思いがつかないでくれた「ともいのち」の縁が沢山あったことに気が付いた。草刈善造先生を通して石原莞爾とその信奉者、隆久昌子さんに出会えたのは法華経の導きと思う。世界連邦・北海道再建の頃から佐藤晴美・松藤日出男さんらの人類愛善会「萬教同根の教え」、菊池信一・宮口俊子・市橋佳子・鈴木 基文さんらの高橋信次・佳子「正法・心行の教え」に接しえた。いずれも熱烈な求道の道であったが、他を排撃する思想はなく、皆大いなるものの愛に生まれた同胞の思いに通ずるものであった。「ともいのち」の喜びと共通に思えている。

世界連邦運動の中で、幕屋のキリスト教伝道者 手島郁郎の月刊誌『生命之光』に出会い、毎月、そのキリストと呼ぶ聖霊の福音に感動することができ、ここにも「ともいのち」の喜びをいただく幸せの日々があった。

こう見てくると、幸運にも、私は心の平和を得ていると思える。その私が世界連邦をどうしてもほしいと思うのはなぜか。

#### 4 心の平和に生きる作法と世界連邦

心の平和を一言でいえば、「ともいのちに生きる」といえる。生死一如の安心に徹して生きるのであるが、それはただ生きるのではない。「ともいのち」がよくお働き下さるようにつまみつつ生きるのである。例えば、食事に当たっては、よく噛む。咀嚼という努力は「ともいのちの愛」に生きる作法である。

家族という、人間の基本的共同体において、人は役割を分担し、食や座席や喜びを分かち合い、わがままを通さないでお互いにルールを守り生きるのが「ともいのちの愛」に生きる作法である。そこに心の平和がある。

人間の共同体は、市町村、都道府県、国家へと拡大している。条例・法律等のルールで納税その他の義務を果たし、社会施設の利用など恩恵を享受している。社会が広がり状況の変化があれば不測の争いや災害も起きる。それ

に対応する役所・議会・警察・裁判所等が懸命に働いて善処する仕組みがある。その社会の進展に貢献するのも、「ともいのちの愛」に生きる作法であり、心の平和がありうる。

ところが目を世界に向けてみると国内に部族や宗派のあらそいがある、互いに武器で殺傷・破壊をし、悲惨な状況がある。そこに割って入って殺傷・破壊・悲惨を止め、和解させるという「ともいのちの愛」に生きる作法がまだ出来ていない。世界平和の組織とされている国連は、その任を果たせていない。その上、世界には、原爆のような大量破壊兵器の廃絶や、人口爆発・地球温暖化等による地球環境崩壊の危機克服という課題に対応できていない。これらの世界課題の対応には、国家主権絶対を原則とする国連を改革・強化して、連邦制と補完性を原則とする世界連邦を実現して当たるほかに道はない。これが個人の「食事の咀嚼」に匹敵する世界人類の「ともいのちの愛」に生きる作法なのである。

世界連邦の実現なくして世界人類の健康はなく、十分な心の平和もないのである。

## 5 ここからの世界連邦 易行道

今、世界人類に必要な平和には三つの原則がある。

### 世界平和三原則

- (1) 戦争の起こり得ない仕組みのある平和
- (2) 地球環境の保全に人類一致で公平・迅速。効果的に取り組める平和
- (3) それぞれの人がそれぞれの地でそれぞれの文化で喜び生きられる平和

これを実現する世界連邦の最低必須の条件は何か。世界連邦憲法に明記されるはずの、自国の軍備を廃棄して安全保障を世界連邦に委ね、世界課題に必須な政策だけは世界連邦政府の政策に遵うことである。従って、各国は世界連邦に加盟するために予算を増やす必要がない。むしろ、軍備のために用意していた予算を減らしていくことができる。だから、決意するだけで、世界連邦加盟が可能である。

連邦制の原則は、加盟各国の統治や経済の態勢を、そのまま認めて加盟させることであるから、加盟は容易である。自国のことは、加盟してから、他から攻められる不安のない平安の中で、国民の知恵を集めて改善していくことができるのである。

その上、補完性の原則で、自国内に、自国では解決できないような大災害等が生じた場合には世界連邦が遅滞なく救援する仕組みであるから安心の幅が広がるのである。

#### 補完性の原則

上位共同体は、下位共同体が自ら目的を達成できるときには、介入してはならない。上位共同体は、下位共同体が自ら目的を達成できないときには、介入しなければならない。

このように、他国を犯す野望を持たない限り、どの国も容易に加盟できる仕組みが世界連邦なのである。易行道と言える所以である。

#### 6 EUの困難に学ぶ 移民なき平安

世界連邦成立のモデルとしてヨーロッパ連合(EU)の成立過程はすばらしいものであった。英独仏等の有力な国を含むヨーロッパが、一つのヨーロッパ合衆国になることを目指し、通貨統合まで進むことができたEUが、その完成の一手手前で止まっている。2005年、フランスとオランダが欧州憲法条約を国民投票で葬り去り、その2年後に「憲法概念は放棄」とEU首脳が合意した。ヨーロッパ合衆国には成り切れないところで止まっているが、ほぼ、合衆国に匹敵する機構を持ち、共通予算も世界15位の韓国の国家予算に匹敵して動いている。ここまで来て、なぜ、欧州統合が止まったのか。ひとつには、中国の台頭とロシアの不穏な動きで新冷戦と言われるような世界状況により、米欧連合の防衛軍NATOとの関係を清算できないこと、二つには、域内の交通の自由化が移民の増加を生み、もとの各国民の職や習慣が圧迫され、故郷としての国の文化に危機を感じ始めたことがある。この事態は、世界連邦の連邦制には、移民の自由に慎重であるべきことを教えていると思う。

「それぞれの人がそれぞれの地でそれぞれの文化で喜び生きられる平和」



を求める人類の進化が問われている。

## 7 戦争の実感の乖離と思いやりの世界化

私には2・26事件の印象が残っている。日支事変の勃発を知らせるポスターが町の各所に張られた印象が残っている。出征兵士として召されゆく小学校の先生を駅頭まで見送りに出た記憶がある。涙を抑えて日の丸の小旗を振りながら。師範学校の寄宿舎でコッペパン1個に味噌汁の食事などが思い出される。その食堂で、12月8日の朝、寮監長の先生から告げられた開戦の大本営発表は忘れられない。登校するときは兵士のようにゲートルを巻いた。学校で学ぶはずの時間が、援農作業や工場作業に使われるようになった。それも遠隔の地に長期間泊まり込むようになった。学生の徴兵猶予がなくなり、援農作業先から、年齢に達したのから召集となり、入隊していった。援農作業中に空襲があった。機銃掃射されそうになり藪の葉陰に隠れた。隣の町は焼夷弾や爆弾が落とされ、一晩中、燃えていた。田舎の一軒家まで攻撃されるという恐怖が感じられた。それに備えて防空壕を作らねばならないと思った。私は誕生日が遅かったので、入隊する前に終戦の8月15日を迎えた。援農は続けられ、札幌の学校に戻ったのは9月の下旬であった。札幌に戻ってみると、全校生が泊まるはずの寄宿舎は、アメリカ進駐軍の宿舎になって、銃を持つ歩哨が立っており、近づくこともできなかった、やむを得ず、校舎の3階に昼を敷いて学校生活が始まった。ひどい食糧難で、高粱粥など、日本人になじみのないものも、やむを得ず食べねばならなかった。下痢が続出。選挙で、庶務委員長にさせられていた私は、下級生の先頭に立ってトイレ掃除をした。食糧が尽き、学習も続けられなくなり、間もなく、食糧のめどがつくまで郷里に帰された。

ほとんど知らされていなかったが、だんだんと戦争被害の状況がわかってきた。原爆の悲惨、東京大空襲の悲惨などは勿論、全国の殆どの都市が壊滅的な被害を受けていたことがわかってきた。その廃墟と食糧難の中の戦後復興は言語に絶する悲壮なものであった。私は戦後、1年半の師範学校生活を終えて、郷里の母校の教師になった。

学校には、紙も不足。学級経営案を書く紙もなかった。学校に残っていた古い帳簿の要らなくなったのを、校長の許しを受けて、ばらばらにし裏が使える紙をもらって学級経営案や指導案を書いて、教壇に立った。その教壇は間

もなく無くなった。教職員組合ができて、教師も労働者だ。生徒より偉いわけではない。一段高い所に立つのはよくないというのであった。〔仰げば尊し〕と歌わせるのは辞めようとも言った。民主化という金科玉条のことばが嵐となって、十分な論議もないうちに、価値観の破壊が進められていく。

私は学校から6キロほど離れた家から通った。靴は一足あったが、それを履きつぶしてしまうと次のを買えそうにないので、いざの時に使うように学校においておき、普段は下駄で通うことにした、しかしその下駄も、往復12キロの毎日では、たちまち減ってしまう。それで下駄の底に缶詰の缶をつぶして貼り付けて通った。戦後の窮乏の一端である。

長々と回顧したが、「戦争があってはならない」という実感のほんの一端である。人それぞれに違いはあるにしても、戦争世代の実感は、戦後生まれの世代に身に沁みるように知らせることは容易ではない。

戦争の当事国、敗戦の当事国にみなぎる緊張感は、その中であって肌身に感じていた者でなければわからない。語り部に戦争の酷さの一部を聴いて、そのことが身に沁みても、自分がその酷さの中にいる実感にまでは届き難い。戦中世代と戦後世代の戦争回避の思いに大きい乖離があるのは、覆い難い現実である。戦争世代の私が、戦争が起り得ない世界体制・世界連邦を求める願望と同じ願望が戦後世代にもあると思つて世界連邦を説いても、その切実感には大きな隔りがある。

戦争世代が活躍した20年くらいの間には、その世代が身に沁みている戦争拒否の実感を背景にして核兵器廃絶や世界連邦平和都市宣言の活動は大いに進展した。また、アインシュタインや湯川秀樹ら、科学者の世界連邦平和への訴えは有力で力強かった。1955年パートランドラッセル・アインシュタイン宣言が出された。その1週間後にアインシュタインは没した。パグウォッシュ会議や国内の世界平和アピール七人委員会など、「国益を競う世界のままでは人類は生きていけない」と訴えた。1981年6月7日、科学者京都会議で30人の科学者が湯川のリードで核兵器廃絶を訴えたが、その3ヵ月後に湯川秀樹は亡くなった。その学統を継ぐ科学者の世界連邦運動への参加もあったが、今や、科学者の沈黙となつてしまっている。

一方、冷戦という恐怖の不戦・平和は、50年も続き、その間の日本は西側の一員として、事実上、平和を享受する50年となった。その間、経済大国

となり得て、戦争による生活苦を忘れ去った。今や、世界各地で起こっている戦争の悲惨は、[思いやり]として理解する他はない。

## 8 人類の忘れもの 国連憲章の修正条項

その上、冷戦によって、1955年にできると期待された国連憲章修正による世界連邦への移行を忘れ去ってしまった。

国連憲章の成立は第二次大戦終了の直前であり、その発効による国連のスタートは1945年10月24日であった。国連憲章の論議の過程は、戦勝国になろうとしている連合国が、敗色濃厚の枢軸国を外に置いたままに、急いでなされたものであったから、遅くとも成立の10年後までには憲章を見直すことを期待しての成立であり、その規定があった。

### 国連憲章 第18章 修正 その第109条の3項

憲章再審議会が、憲章の効力発生後、第10回の年次総会までに開催されなかったならば、第10回の総会の議事項目の中には、憲章再審議召集の件が掲げられる。そして総会が過半数で決議し、安保理が7理事国の賛成によって決議したなら、憲章再審議会が開催される。

この国連憲章修正で世界連邦に移行するのが、世界連邦運動の目標でありその期待は大きかった。日本の世界連邦運動もその期待で盛り上がり、加盟国の偏り是正のため、未加盟国の国連加盟促進にも努力した。ところが1950年朝鮮戦争以来の東西対立、冷戦の長期化で、その修正審議は先延ばしされ、何と！70年経過、遂に今日まで国連改革はなされなかった。いわゆる敵国条項(第53条)の改正も成されていない。驚くべき大忘却！これも戦後2世代の経過による不戦願望の乖離、人類の忘れものとなっている。

## 9 だが この足跡を見よ

このように、戦後世代には忘却の中の世界連邦という状況があるから、今や、世界連邦の必然性と運動過程を学び、それを引き継ぐ教育が不可欠となった。しかし、学校教育も、社会教育も、おいそれと世界連邦教育を受け付ける状況にはない。マスコミも、今や、世界連邦の認識不足、冷淡である。

その蒙を開かなければならないが容易ではない。

しかし、忘却の中で見えなくなりそうな世界連邦であるが、消え去ることのない足跡がある。現に動いている (1) 世界化された国連総会 (2) 世界法のモデル国際刑事裁判所(ICC) の存在と (3) 日本総人口の八割を超える世界連邦平和自治体宣言、そして (4) 日本衆議院本会議における 2005.8.2 の国会決議、参議院における 2016.5.25 の国会決議である。この足跡をバトンとして戦後世代に世界連邦の希望を引き継がなければならない。

### 黄金のバトン

#### (1) 世界化された国連総会



国連未加盟国会議 1954年5月

主催 世界連邦建設同盟 世界連邦日本国会委員会

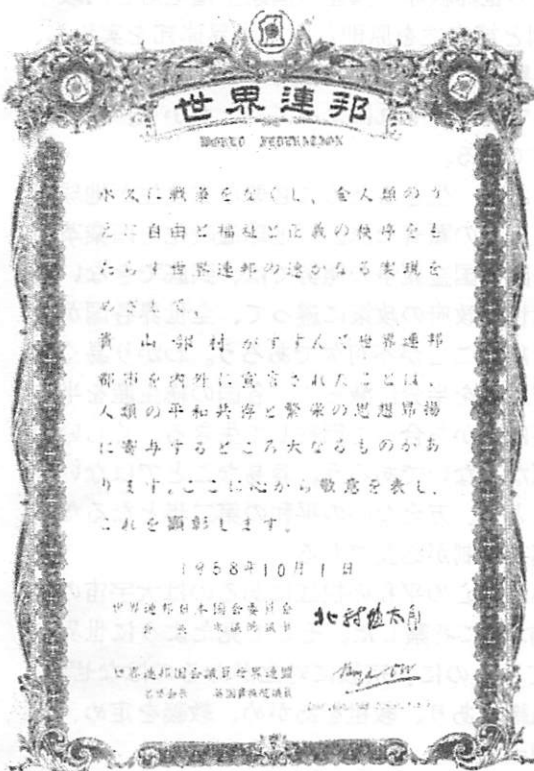
193 カ国が参加する ほぼ全世界と言える国連総会になった。国を通して全世界の意志を決められる世界の総会の場ができていたのである。

#### (2) 世界法のモデル国際刑事裁判所(ICC)の稼働

ICC の本部はオランダのハーグにある。今や、どの国の大統領でも重大な犯罪を犯せば、さばきを覚悟しなければならない。米中ロは未加盟。日本は最大の指導国。



### (3) 日本総人口の八割を超える世界連邦平和自治体宣言



早期に宣言を議決した自治体への顕彰状の例である。これらの自治体に続き、1都2府25県350余市町村に世界連邦平和自治体宣言が広がった。年を経て忘れている人も多いが、取り消した自治体はない。

住民の意志は明確に記録されている。

(4) 日本衆議院本会議における2005.8.2の国会決議及び日本参議院本会議における2016.5.25の国会決議



日  
本政府は世界連邦実現への道の探究(探求)に最大限の努力をすべきである。と記された国会決議である。

### 10 心の平和と世界連邦

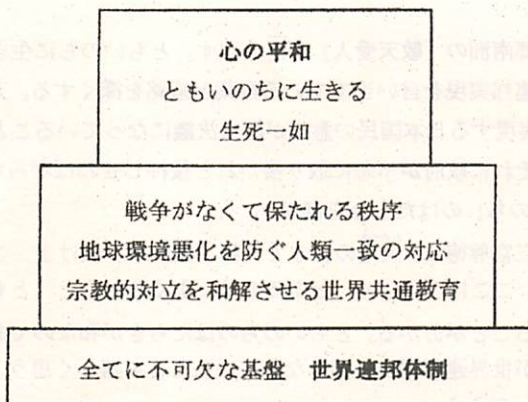
心の平和は、先に長々と振り返ったように、大いなる宇宙生命・ともいのちに生かして頂いている自覚から、喜び生きることである。その作法は健康な生き方となり、近隣の共同体での健康な生き方となり、拡大して、民族・国家、世界の共同体に至るまで、ルールを守り、貢献し、恩恵を受けて喜び生きることになる。そこには、我欲にとらわれて他の平安を脅かすことや、それを拡大した戦争は抑制される秩序が、どうしても必要である。その究極の社会秩序が世界連邦体制である。

今、その秩序はまだない。現在の世界秩序・国連の国家主権絶対と内政不干渉の原則を改革強化して連邦制と補完性を原則とする世界連邦を実現し、全世界各国の軍備を撤廃し、世界警察と各国警察の協力で世界憲法の秩序を保てるようにすることが、第一歩である。それによって、ともかく、残虐・理不尽な殺傷・破壊は除くことができる。

しかし、その他に、まだ心配がある。生きるために必要な衣食住が地球環境の悪化で脅かされることである。その顕著な原因の地球温暖化を産業革命以前に引き戻すには、現状の各国の国益競争の態勢では、到底できないと思われる。この点については世界政府の政策に遵って、全世界各国が公平・迅速・効果的にCO<sub>2</sub>減に取り組むことが不可欠であろう。わかり易く言えば、人口増加を止める、旅行交通等を半分に減らす、各国の総生産を半分に減らす、食糧物資を大切に公平に分かち合って節約して生きる、くらの覚悟で取り組める政策でなければならないであろう。容易なことではないが、こうして地球環境の悪化を防ぐことが、万全な心の平和の第二歩となるだろう。これには、どうしても世界連邦体制が必要である。

更に残る心配は宗教的対立である。心の平和の根底にあるのは大宇宙のいのち・「ともいのち」であることは先に考察した。そこで見たように世界の四聖の心の平和の根源は通底しているのに、宗教に対立があるのはなぜか。それは、宗教が教団と呼ぶ団体組織であり、教祖をあがめ、教義を定め、組織の拡大を図り、そこに、教団同士の競争・敵対があるからである。そこでは通底であるはずの神を別々のもののように見させたり、教祖と混同したりして対立させ、争いの歴史から怨念を募らせているからである。それぞれの教祖の人格や教えを尊び崇めることはよいが、その根底の神を忘れて、争うのは残念である。日本はその通底の神を認め、お互いの教えに寛容で、和を保つ伝統を持っている。この伝統のような、教団にとらわれない宗教的情操の教育による世界人類の心の平和がぜひ欲しい。これが第三步目の心の平和条件である。これは、武力による抗争をなくす世界連邦秩序の中の世界共通教育として実現されることとなろう。

こう考えると世界平和の三原則が、そっくり、心の平和の条件であることがわかるであろう。そして、その三つの条件は世界連邦実現を不可欠の基盤として成り立つことが理解されるであろう。



## 11 戦後世代に求められる世界平和の認識

先ず、世界の現状を見よ、と叫びたい。私たちの祖国日本では国民はみんな安心して暮らしている。街頭で物乞いして命をつなぐ<sup>乞食</sup>は見かけない。夜の女性の外出もそれほど危険ではない。災害や事故はあるが助け合いや救助はほぼ行き届き、難民となって国内外に救いを求めなければならない者も見かけない。食料・燃料などもほぼ需要を満たし交通機関や道路網も行き届いて安心して交流し働くこともできる。宗教教団も多々あるが不穏な抗争になるほどの対立はない。子どもたちはみんな基礎教育を受けることができている。戦後世代は何の疑いもなく平和な社会に生きていると言えよう。しかし、世界人類の全体に目を転じてみよう。身近な国内の抗争の為に15歳にも満たない子どもの25万人もが銃をもたされ兵とされている現況がある。子どもでも使えるような銃を生産し売り込んでいる現実がある。国内紛争やテロの悲惨は連日のように報道されている。中東のシリアは人口2200万を超える大きな国であるが、その国内紛争と他国の介入で、何と、1100人以上が難民となりさ迷っている。世界の平和を維持すべき国連はその悲惨を救うことができない。無辜の住民を何10万も一挙に虐殺する核兵器が廃絶できず、廃絶すべきだという原則にはみんな賛成するが現実の安全保障のためには、却って、その研究、更新を競う恐ろしさが増している。人類人口は、この一つの地球に80億に達しようとしている。終戦の頃の4倍である。その人類の生産と消費の拡大は地球環境を圧迫し気候変動による災害が増える一方となっている。

これらの窮状から脱出できる道は、世界連邦を実現して軍備と兵器の管理が完全にでき、かつ地球環境の保全に公平、迅速、効果的に対応するほかはない。

(1) 敬天愛人

その実現のために西郷南洲の「敬天愛人」を思い出す。ともいのちに生きる祈りの作法の世界版である世界連邦実現を言い当てている言葉と感銘を深くする。天意のあるところに従い、人類愛を実現する日本国民の意志が国会決議になっていることを国民みんなのでかみしめたい。それに政府が早急に取り掛かれと後押しせねばならない。

(2) 和という「ともいのち」のはたらきを喜ぶ

報徳の教えを説いた二宮尊徳に「天地の和して一輪 福寿草 咲けよ この花 幾代ふるとも」の歌がある。ここに「和して」とあるのは、よく味わうと「ともいのち」が実現する縁を表していることが分かる。ともいのちのはたらきが和なのである。この和の国日本の国民の意志が世界連邦国会決議になっていることを嬉しく思う。

(3) 心に太陽をもて唇に歌をもて

日本独特の有難い二つの文化、一つは全国津々浦々で行われているラジオ体操。もう一つは母と子で一緒に歌ってほほ笑み交わす豊かな童謡唱歌の存在。この二つは世界に普及して喜ばれ、人類の心の平和にも資するに違いないと思っている。



「歌は世につれ、世は歌につれ」と言う。歌うと嬉しくなる。ありがたい。



しあわせの歌

(曲) 作詞 作曲  
石原健治 木下統二

はやめに、明るく

しあわせは おいらのねがい しごとはずっとも くるしいが  
なされるあせに みらいをこめて あかさいしやうを つくることみん  
な とうた おう しあわせのうたを ひ  
びくこ

しあわせの歌

石原健治

しあわせは俺らのねがい  
仕事はとろても苦しいが  
流れる汗に未来をこめて  
明るい社会を創ること  
みんなとうたおう  
しあわせの歌を  
ひびくこだまを追って行こう

しあわせは私のねがい  
あまい思いや夢でなく  
いまの命をより美しく  
つらぬき通して生きること  
みんなとうたおう  
しあわせの歌を  
ひびくこだまを追って行こう

三 しあわせはみんなのねがい  
朝やけの山河を守り  
働く者の平和の心を  
世界の人に示すこと  
みんなとうたおう  
しあわせの歌を  
ひびくこだまを追って行こう

——「青年雑誌」(五)昭和31・8